Best Rugby
1. right tackle

7 人制が正式種目になる 2016 年オリンピックと 2019 年のラグビーワールドカップ日本開催を前に日本のラグビーの現状は一向に前が見えず夢が持てないのは残念なことです。1970 年待つ著しい変化を遂げてきた世界の動きを正視しないままに数少ない情報にも真剣に耳を貸さず無策無知に過ごしてしまった結果 7 人制も女子ラグビーも 20 年の遅れをとってしまっている現状は実に情けないことです。将来を担う若いラグビーマンの夢の舞台である正月に花園で開催される高校大会の予選参加チームは減る一方で最多であった 1490 チームから今年は 807 チームという減り様でその中には数校による合同チームも含まれているという現状です。ラグビーが「きつい」、「きたない」、「危険」な『3K』スポーツと言われだしてから久しいがそれに対しする反論も風評をくつがえす新鮮な動きも見られませんでした。ラグビーの良さとその素晴らしさ主張する声も聞かれず若い人たちに広く楽しさを与えることができませんでした。

JRFU は「2016 年オリンピックでの 7 人制メダル確保」、「2019 年ワールドカップでの 8 強」という計画も空しく聞こえ、高体連が考えている高校ラグビー改変の青写真も何もしないよりましであっても枝葉の問題に過ぎないものです。その前に若い人たち、とりわけ彼らを指導する人たちのラグビーそのものの認識や意識の改革をはかることが急務です。

先に考察の資料として「Identities and Rugby」をまとめて書きましたが、ラグビーの楽しさを熱く語り合って若者の心に灯をともさなければなりません。心に灯がつき立ち上がった彼らに外国の生活とラグビーを経験させコンプレックスを取り除くことは成長する樹木の肥料となり太い幹となって大木に育つでしょう。その過程において「2 位」でなく「1 位」を、「Better」より「Best」を目指して大きい夢を持って励んでほしいものです。「Best Rugby」シリーズは彼らの Flair を活かす助けとなることを望むものです。

Best play は楽しいラグビーを追求すると同時に IRB が目指しているラグビーを simple and easy にする方策であり、ラグビーが 3K(きつい、きたない、危険)と言われているのを解消する方策でもあります。

最近、高くて危険と思われるタックルを数多く見られるようになりました。ボールを持った相手プレーヤーに一切何もさせないようにボールごと捕えてブレイクダウンすることを意図したものでしょうが、相手に腰より上の胸の高さに身体を当てて両手で相手を抱え込み勢いよくはずみをつけて倒そうとすることは、ボールを持っているプレーヤーの体勢が崩れ具合で負傷にもつながりかねません。ルール上は第 10 条 4(e)の第 2 項でそのようなタックルしようとすることも禁じられています。

> A player must not tackle (or try to tackle) an opponent above the line of the shoulders even if the tackle starts below the line of the shoulders. A tackle around the opponent's neck or head is dangerous play.
> **Sanction:** Penalty kick

タックル歴史的に復習しルールの equal condition, open play, safety という 3 つの精神が生きてくるように心がけ better にそして best play を追求していかなければなりません。

タックルと言えば「飛び込む」ものというイメージが浮かびます、タックルは seize and stop（捕えて止める）ものということを前に出して考えて下さい。イングラドに於ける正しいタックルの指導でも、タックルする時に爪先が地面から離れないようにと指示しています。

The History of the Laws of Rugby Football の Law II TACLE は 1866 年の記述から始まっています。

> **1866.** In Laws of Football as played at Rugby School, this was known as **" Maul outside goal line, and takes place when a player holding the ball is held by one or more players of the opposite side, and if he cannot get free or give the ball to some other of his own side (not in front of him) who can run with it, he calls " have it down.** " There was no mention of what " held " meant.
>
> It was quite the custom for the opponents to call " maul him " or " pull him over " or " get the ball from him " or " hack him over " until he put the ball down.

「タックルはボールを持って走っているプレーヤーが相手チームの１人またはそれ以上のプレーヤーに捕まって身体が自由にできず、ボールを持って走ることのできる味方にボールを渡すことができなくなった場合で、捕ったプレーヤーは" have it down "（ボールを離した）とは言ったということです。」問題の捕えられ方については何も記録されていません。一方、捕えた側は" maul him "とか" pull him over"（引き倒せ）時には" get the ball from him "（ボールを奪え）

“ hack him over ”（蹴り飛ばせ）という激しい言葉をかけて立ち向かったようです。このような maul の状態は非常に大きい時間の浪費にもなりました。20 分続いたことが時々あったようです。どうにもならない時はスクラムになるのですが、優勢な側がスクラムにボールを入れる権利の取り合いでした。面白くないので色々と話し合われました。

1874 年 R.U.は maul の状態を認めたわけではありませんが、タックルについて一つの定義を紹介しました。「ボールを持って捕えられている（Held）。ボールがしっかり抱えられている。そして両手でボールの上から抱えられている」状態であるとしました。

This “ maul outside goal ” was a tremendous waste of time, sometimes as much as 20 minutes, simply for the benefit of putting the ball down for a scrummage. So in 1874 the R.U. did not adopt the “ maul outside goal ” but introduced the “ tackle ” the definition being : “ When the holder of the ball is held by one or more players of the opposite side. ” Still there was nothing to denote what “ held ” meant ; it was generally inferred that it had more to do with the ball than the player, “ tackled with the ball ” and “ the ball held ” and “ the ball fairly held ” coming into the Law : it was generally understood that “ the ball fairly held ” indicated that hands had to be on the ball-- and both hands.

1905 年 held についてプレーヤーがボールを持って立っている時“ パスができない ”という内容に始めて定義されました。

1905 was the first date that “ held ” was defined : “ Held is when the player carrying the ball cannot pass it. ”

1906 年 I.B.がプレーヤーとレフリーにそのような回状を出しました。‘ プレーヤーが相手に捕えられ、倒れ、ボールが地面についた時タックルがなされたとする ’ レリングのことも考えて踏み込んだことを発言しました。

1906. The I.B. issued a circular to players and referees laying down “ A player must be considered as tackled, if he on being grasped by an opponent, fall, and the ball, whilst in his possession, touch the ground. ”

しかし、1910 年に Law は held を削徐したまま ‘ タックルはボールを持った人が相手側の 1 人またはそれ以上のプレーヤーに捕えられパスできない状態 ’ となっています。当時のタックルに対する議論やプレーヤーの紛糾が察しられます。

1910. The definition for “ held ” was cut out and the wording combined with the “ tackle ” reading : “ A ‘ tackle ’ is when the holder of the ball is held by one or more players of the opposite side so that he cannot pass it. ”

1911 年 he cannot pass or play it と play が加わりました。この年 Note に重要な play が加えられました。“ it can only be brought into play with the foot ”タックル後は足だけでプレーにもどせると明記されたことは重要なことです。先ず、足でプレーすることは共通認識としてはあっても Dead という感覚ではありませんでした。1926 年 Dead の定義の（b）に after a tackle となっています。

1911. The definition was added to, to read : “ A tackle is when the holder of the ball is held by one or more players of the opposite side, so that he cannot pass or play it. ”

Note.-- When a player is tackled with the ball it can only be brought into play with the foot, but if a player carrying the ball be thrown or knocked over (but not tackled), and the ball touches the ground, he may nevertheless get up with it and continue his run, or pass it. ”

1912 年にパスまたはプレー出来ない状態が he cannot at any moment 或る瞬間続いた場合という表現が加わりました。any moment の長さについてはいろいろ議論されたことでしょう。

1912. It was again altered : “ A tackle is when the holder of the ball is held by one or more players of the opposite side so ; that he cannot at any moment while he is so held pass or play it. ”(The Note was the same.)

1921 年に R.U.は同じ定義を確認し I.B.は extra note でレフリーにタックルがあれば何でも笛を吹かないように指示し、タックルされたプレーヤーもボールを直ちに放し立ち上がれば足でプレーしてもよいとしたのに対し、R.U.は同意しませんでした。不確定な当時の様子が想像できます。

1921. The R.U. retained the same definition, but the I.B. introduced an extra Note : " Referees frequently order a scrummage when a player is not actually tackled. It is not necessary to form a scrummage when a player has been tackled ; any player who is onside can then play the ball with the foot including a tackled player who must immediately get off the ball. "

The R.U. did not agree with the I.B.'s ruling re the tackled player playing the ball, and did not include this extra Note in the : definition.

1926 年 Law の一般改定で前進するのですが、もう一度プレーの流れを整理しましょう。ボールを持っているプレーヤーが１人又はそれ以上の相手プレーヤーに捕まりパスすることもプレーすることもできない。そして、その状態がある瞬間続く held された状態となり、ボールは放たれ、ボールは足でプレーされなければならない、ころころと転べば当然拾い上げて走ったでしょう。play the ball については、the game was a carrying game であるから、プレーヤーはできるだけ永くボールを持って走り続けようとし、その結果、もがく動作となり（went on struggling）レフリーにとってむずかしい状態になったというのです。running handling game ラグビーの原点がみえてきます。

1926. With the general revision of the Laws a Law was introduced for " Tackle " and the definition changed to : " a tackle occurs when the holder of the ball in the field of play is held by one or more players of the opposing side, so that whilst he is so held there is a moment when he cannot pass or play the ball. "

The R.U. had always opposed the inclusion of " play the ball " and continued to oppose it, contending there was too much ambiguity as to when a player could not play the ball ; the game was a carrying game, and as long as a player was carrying it he was playing the game and the ball : the result was that players went on struggling and were at the mercy of the ideas of the referee as to when he was tackled, and referees varied in opinions.

1937 年の改訂でも表現や文字はかわりましたが内容に大きな変化はありませんでした。held については、he is so held the ball comes in contract with the ground or there is a moment when he cannot pass or play the ball となりました。

1937. The definition was changed to " a tackle occurs when the holder of the ball in the field of play is held by one or more players of the opposing team so that whilst he is so held the ball comes in contact with the ground or there is a moment when he cannot pass or play the ball. "

考察

以上、タックルの歴史をみてきました。先ず、ボールを持って走ったエリス少年に賛辞を贈らねばなりません。そして、ボールをもって走ってくる相手を捕えボールを奪い合った人たちの勇気をほめねばなりません。更に、held についていろいろと話し合いゲームを楽しむ工夫をした先人たちのことを思う時、ラグビーの面白さの深さがわかります。

Law の歴史を読むとき、「何々しなければならない（must）という筋道ではなく、楽しむ play の方向を言い、戦い方であり、勝ち方を皆で考えて game を創り出していったのです。ラグビーは running handling game である前に carrying game であることを認め合って carrying the ball が続くように考えていったのです。tackle の時に curious な状態が生じます。それをうまく切り抜けて carrying the ball し展開を図るのがラグビーでありラグビーの面白さです。身体と身体がぶつかる激しさの表面的なものをとりあげて、短絡的に格闘技だという間違った理解をしてはいけません。ぶつかり合いながらボールを carrying するのを競う競技なのです。一方が続けようとし相手はそれを止めようとする攻防を冷静に考えると矛盾する問題ですが、的確にタックルの正しい方法 right way を示している図があります。

HEAD BEHIND SEAT（頭は臀部の後）と I MUST FIND SUPPORT （味方を見つける）で carrying に関して equal condition 即ち対等にプレーの継続を目指す状況が保たれています。perfect(完全)に相手の carrying をゼロにするものではありません。しかも、safety 安全であるというスポーツの原点に十分留意されています。（注　西川ラグビーコラム参照）

2012.01.09
西川　義行